

ボランティアの心

趣味生かすボランティアを

阪神・淡路大震災の後、ボランティアの活躍が注目され、その年はボランティア元年と言われていました。ボランティアとは何でしょう。ボランティアは第三者に対して希望する事に金銭・物品以外で手助けすることと私は理解しています。如何でしょうか。

手助けの内容は千差万別となり、個人一人、一人では対応できるものではありません。グループわは、社会人として長い間苦労してきた人々の集団ですので、それこそ千差万別の集団です。加えて「再び学んで他のために」の心を持っています。

私の所属する東灘区では、特別養護老人ホームでの、歌の訪問、書道指導、ふれあい喫茶の手伝い、入所者との碁の相手、麻雀の手助け、幼稚園での食育・園児と野菜作りと多様な場で毎月協力しています。



クラブケナフの会では子供たちにケナフ紙すきをしながら「モットイナイ」「温暖化防止」を訴えています。また、グループわではありませんが、梅一つ火会では梅普及活動、地域福祉センターHP作成、パソコン教室です。

ボランティア活動で相手から元気をもらう、とよくいわれています。信用していませんでした。

参加してみると老人たち（私も老人ですが）、児童たち、地域の人との会話から確かに元気をもらっています。企業人時代での会話とは全然違います。ストレスも溜まりません。

最近グループわに入会される方、ボランティア活動に参加される方が減っています。一方、趣味活動には積極的に多くの方が参加されています。その趣味を生かしてぜひ、ボランティア活動に参加しませんか。

残念なことですが、最近行政、業者がボランティアは安直な労働力と考えている節があります。対抗するには、やはりグループわを中心として活動する必要があると考えています。

長谷川 博（生環9期）

須磨区会が活動フォーラム

6月24日(木)、一ノ谷プラザで須磨区会の「地域活動フォーラム」を催した。任意参加という形をとったので会場が埋まるか不安があったが、幸い45人の来場を得た。区会員のほぼ4人に1人が参加したことになり、区会最初の行事としては成功だったと考える。

プログラムは、5つの活動グループのパネリストが発足の経緯や現状の課題を語り、さらに質疑応答や意見交換をおこなうという2時間の内容で、司会は私が務めた。

須磨海岸清掃グループの梅谷正芳氏(国2)はわの表彰制度の第1回受賞が力づけになったこと、NP0須磨歴史倶楽部の川島清一氏(生4)は区の観光行政の一翼を担い町おこしにも寄与していること、児童見守り横尾ダーツクラブの井林良幸氏(生10)は小学校のゲストティーチャーとして、特にピオトープ整備や稲作指導に経験を生かしていること、シルバーカレッジ友が丘クラブの菅田忠志氏(生11)は同窓会の枠を超えて地域全体に健康ウォークを普及させたことや、メンバーの結末に会費制が役立っていること。

また、ぐるーぷ峠(神港園サニーライフ白川ボラ

活動報告をするパネリスト



ンティア)の私、細野恵久(福3)は10年余の活動を経て今ではむしろ施設の信頼に支えられていることをそれぞれ紹介した。

グループのメンバー構成を見ると、地域活動ならではの特徴がよく現れている。すなわち、わの会員に限る(海岸清掃)という条件がある一方、会員かどうかは問わないがカレッジ仲間だけで(友が丘ク)とか、さらには地域の方々も加えて共に(歴史倶楽部、横尾ダーツ、ぐるーぷ峠)、というように多様である。活動を通じて目的や内容に適応した形に進化してきたといえるだろう。どのグループにも共通の課題は後継者の確保といえそうだ。パネリストの報告には、新会員への期待がにじんでいた。

(須磨区会長 細野恵久)